

善導教学と趙宋天台

——特に知礼の浄土教をめぐって——

福 原 隆 善

中国浄土教において、諸師とは全く立場を異にして、特に凡夫がいかに浄土に往生するかを眼目に浄土教を展開せしめた唐代の善導の浄土教は、その後の時代にもかなりの影響を及ぼしたと思われる。そこで今は趙宋天台、特に知礼の時代を中心とその影響の一端をみてみたいと思う。

知礼を前後に宋代天台家においては『観量寿経』を中心とした浄土教が展開されており、註釈もそれに関するものが多い。これは天台智顓が『観経疏』を著わしており、諸師にも『観経』の註釈が多いからであろう。天台疏については疑作説もあるが、知礼は真撰とみており、『観経疏妙宗鈔』を著わしている。本書は、善導教学に影響されている山外派の僧に対する批判とともに、山家派の僧に対する啓蒙をも目的に撰述されたといわれる。^①知礼にとつては、善導の『観経疏』の立場にどう対処するかは問題であつたようで、天台は『観経』を第三時方等教としたのに対し、化法の立場からは円教

であり頓教であるとして、究竟とする立場から善導疏に對抗した。^②知礼自身も強い浄土教信奉者であつたが、善導のそれとは立場を異にしている。知礼は五十四歳の時、念仏施戒会を創設したが、僧俗男女一万人が集まつて念仏したといい、以来毎年二月十五日に行なわれ、二百年ほど続いたといわれる。結社念仏はこの頃から各地で行なわれたようで『樂邦文類』にも多くの念仏結社のあつたことが伝えられている。ほとんど廬山慧遠の白蓮社の念仏を慕うものである。^③知礼は翌年『観経融心解』を著わし、天台の心観為宗による理観念仏を説いた。ところが本書が撰述された翌年には、山外派の智円は『観経疏刊正記』を著わし、また知礼と同門の遵式すら『往生浄土懺願儀』を著わし、共に善導教学に影響されながら願生思想を展開している。知礼には全く願生思想がなかつたわけではない。法華懺を修し、焚身供養し、往生浄土を願つてゐる。^④しかし、天台本来の立場を逸脱し、智円のごとく

事観にのみ傾くことに批判的であつた。一方、蓮式の『往生浄土懺願儀』には「厳浄道場」をはじめ十種の行法によつて往生浄土を目的とすることが説示されている。引用される經典は『無量寿経』をはじめ、浄土三部経といわれる經典が多く、善導流の影響を受けたと思われる。中でも注目すべきは、十種の第三「正修意」に、世親の『往生論』によつて五念門を修することが往生浄土の正修行として示されていることである。善導はこの五念門により、独自の五種正行を形成している。蓮式は直接善導の五種正行の影響をうけたわけではないが、その帰するところは善導流な考え方に近くなつており、この点が知礼にとつては不服であつたと思われる。とくに『妙宗鈔』の冒頭では、この点に関して「多く事相を談じ、少しく観門を示す。」とあつて、智円の立場を批判したものであろう。当時『観経』の十六観を事観とするか理観とするかについて諸説があり、元照の『観経義疏』によれば、

- 一、十六観のすべてを理観とする説
- 二、十六観のすべてを事観とする説
- 三、十六観中、第九仏身観のみ理観とし、他を事観とする説。

がある。智円は『刊正記』（失）に、第九観のみ理観で、他は事観であり、多きによつて判ずれば皆事観であるとの主張

がみられるから、第三説の立場であることが知られる。

山外派に対する批判もさることながら、山家派の蓮式なども善導教学に影響されて天台浄土教を展開していることに對して、知礼は天台の止観の立場からこれを無視できなかったにちがいない。蓮式には『往生浄土決疑行願二門』『往生浄土懺願儀』が残されているが、いずれも引用経論の内容からみて、善導教学の影響が予想せしめられる。また宗曉の『樂邦文類』にはその他の浄土教関係の著作の一部が伝えられている。その中の『念仏方法』には、念仏について詳述されているが、念仏とは仏の三十二相を縁とし、常に心にかければ仏を見ることができるといふ。また、仏の名号を一心に称すれば現身において仏を見ることができるといふ、しかもなお「現に見ること多しとするも、これ仏名を称するを上たりとす。」とあつて、懷感の例を引いている。懷感是一向に阿弥陀仏の名号を称して三昧を得、現前に見仏した人である。このことによつて称仏の法のすぐれた点を示すというものである。念々に相續して縁を名号にかけ、口には阿弥陀仏を喚び、心に仏を思い、字々分明に百声・千声・万声、あるいは一日・二日・七日仏名を称し、心を一にすることの重要性を説いている。『往生浄土懺願儀』には、この一心について理の一心と事の一心のあることを述べている。入道場をはじめ、すべてのことは結局無性であつて、不生不滅である、法界の一相は

法界の縁の如きであるから理の一心といい、仏に心をかける時、誦経や行道などをも含めて他の事を念じないで、専ら仏を念じることが事の一心といっている。ここで遵式は、理の一心を目的とするものであつても、修し易い事について専心する事の一心を勧めている。

知礼は、『観経融心解』を著わし、天台の浄土念仏について啓蒙したにもかかわらず、なお善導教学の影響をうけた浄土教が展開されることに對して、六十二歳の時に『観経疏妙宗鈔』を著わして厳しく批判を加えている。天台疏によりながら、観を一心三觀とみ、所觀の仏は一体三身、実相を体とし、心觀を宗となし、生善滅惡を用としている。さらに教相では、化法の立場では大乘円頓の教となし、一心三觀による天台浄土教を展開している。立場としては七年前に書かれた『観経融心解』と変わらず、觀念念仏を強調している。しかし知礼自らも理觀を修することの困難さを感じていたようであり、天台の常行三昧を勧めて、実践的には口称念仏に重点が置かれてきている。本来は一心三觀を本質とする十六の理觀によつて円融三諦の理を証得するというものであるが、事觀に對し理觀は困難であり、事相的念仏が実際の行の上には行なわれてくるのである。知礼はこの点を正助の關係で説明づけている。すなわち「須らく外事懺を加え、内理觀を勤め、正助双て行じ、願を加えて要制す。必ず宝刹において

速やかに衆生を証すべし。」^⑩といい、また「妙觀はこれ正、淨業を助となす。正助合して行すれば、能く四種の極樂国土を感じ、三身の弥陀世尊を見ることを得。」と述べて、「正助双行」「正助合行」の実踐行を確立している。「正助双行」「正助合行」といつても、実際には理觀は困難であり、すでに『観経融心解』では「儻し一機未だ円照なること能わざるあれば、且く事相に隨ひ、境を歴て觀すべし。」^⑪といい、『妙宗鈔』においても、「事理の一念同じく修すと雖も、しかも理は難く事は易し。事易き故に先ず現じ、理難きが故に後に発す。故に般舟三昧に三十二相を以て事觀となし、即空假中を以て理觀となす。境觀すなわち同時に修すと雖も、境必ず先ず成じ、境に託して觀に進み、觀に藉して境を顯わす。更に進み更に顯われ、凡より聖に入る。」^⑫とあつて、理觀の実踐の困難さを指摘し、知礼自身もこれを感じし、修し易い事觀行を先に行なつて理觀へと進むべきことを論述している。天台觀心の立場にあり、心觀為宗としながらも、その理觀がいかに難しいことであるかは自らも認めている。当時は觀門を行なうものが少なく、事相を談ずるものが多いといつた『妙宗鈔』序のことばの傾向が自らのうちにもみられることとなるのである。したがつて『妙宗鈔』で示した即心念仏も、最終的には理觀の念仏にすすむことであろうが、事觀的な念仏がどうしても先行する念仏となることは必至である。

娑婆即寂光淨土といつても、それは円融三諦の理を体験したものが証得するのであり、実際には娑婆では罪障多く、根機薄弱である故に一心三觀による修道は容易には実践できないので、はじめに阿弥陀仏の依正二報を觀することにより、一心三觀をもつて円融三諦の理法を証得することとなる。すなわち「事行既に勤む。理觀いよいよ進む。」のである。そのため知礼自身も事相念仏のための具体的な実践として結社念仏を行ない、事行として捨身行をもししばしば行なっている。これは時代機根を鑑み、理觀行の困難さを自覺した上での往生極樂の実踐行なのである。

このように知礼は、宋代天台浄土教家の智円等が善導教学の影響をうけて事相的な念仏の傾向になつてきたことに対して厳しい批判を行なつてきた。しかし当時の教界は全体に事相の実踐の傾向が強く、機根を考えれば、次第に止觀の正當な実践が為されにくくなつてゐることを自らの上にも認めざるを得なくなつた。ところがそれでは天台止觀の立場が失われるので、凡より聖へ至る事相念仏の実踐を通して円融三諦の理を証得する方法を即心念仏の実踐のうちに主張したと思われる。知礼は直接に善導教学の影響を受けて教学を組織づけたわけではないが、時代や機根を考えれば、初門にあつては善導の立場と同じような方向へ傾かざるを得ない結果が生じてくるのであり、それが事觀的な念仏の強調となり、さら

に称名念仏の形で表われてくるのである。知礼は生涯称名念仏を実践した人である。臨終の時も数百声の阿弥陀仏を称して入寂したといわれ、実践としては、最後まで称名念仏行を行なつてきたのである。

- 1 安藤俊雄氏『觀無量壽仏經妙宗鈔概説』参照
- 2 『大正蔵』三七・一九五中
- 3 高雄義堅氏『宋代仏教史の研究』参照
- 4 『大正蔵』四六・八五八上
- 5 『大正蔵』三七・一九五上、安藤氏前掲書
- 6 『浄全』五・四四七下、次の智円の説は戒度の疏によるもの（『浄全』五・四四七下）
- 7 8 『大正蔵』四七・二一〇下
- 9 『大正蔵』四七・四九一下
- 10 『大正蔵』三七・一九五下
- 11 『大正蔵』四六・八六八上
- 12 『大正蔵』三七・二〇二中、鹽入亮達氏『趙宋天台における実践面の考察』（『印仏研究』一一の二）参照
- 13 『大正蔵』四六・八六九中
- 14 『大正蔵』四九・一九三下、同四〇九上